五ツ又自治会だより

平成26年11月号　第50号
発行日　2014/11/1
発行人　新井正司
編集人　広報部　岡　和男

五ツ又での災害は何か、まずどう対処するか。

川越市はご存知の通り、地形が西高東低で、およそ西側半分が洪積台地、東側半分が沖積平野です。洪積台地は標高が高く、水の利便性が悪く、畑作に向いています。これに対し、沖積平野は標高が低く、水の利便性がよいので水田向きです。これらの地形的特徴からみて地震・水害に対して各地域の状況がどうなるのかはご推察のとおりです。

地震は首都直下、関東平野北西縁断層帯、立川断層帯を震源とするものが想定されています。川越西部の震度は東部に較べると1ランク低いといわれています。

五ツ又地区はその洪積台地東端にあたります。地震・水害には比較的安全と言われてます。土砂災害の危険地区は川越近辺では2か所で、近いところは川越線川越駅南部トンネル付近ですからこれも問題が少ないでしょう。

東北地方太平洋沖地震はその大きさで私たちの意識にフィルタをかけました。私たちは大災害とは地と水にかかわるものと意識し始めたように思えます。これだけでしょうか。

「地震、雷、火事」と怖いものを挙げ、その4つ目に「親父」を加える言葉があります。親父が怖いものと認識されていたのか、すでに親父が権力を失っていたことを揶揄したものかわかりませんが。ところが、気象予報士の森田正光氏は「おやじ」とは「おおやまじ（大山風）」のもじりで実は「台風」であるといいます。つまり災害が4つ挙がっていることになります。その怖さのランクを順に並べたものとすると火事は台風より怖いと認識されていたのかもしれません。地震などの災害に続く二次災害に火災があります。

五ツ又で上の4つの災害で一番怖いのは火災です。もしもの時、道路が狭く緊急車両が入れない地区があります。皆さんの努力で火災はここ十年以上起きていないのが幸いです。しかし放火騒ぎが続く昨今、五ツ又は安心でしょうか。

河川の氾濫、震度、液状化現象などの被害が予測されている地域の自主防災会は災害対策はずいぶんと進んでいます。自主防災会の主催する各種訓練、防災会の対策品備蓄が施策されています。この施策の中に老齢者の名簿作成があります。個人情報保護の立場から自治体では名簿の公表に消極的です。しかし、各自主防災会でも同じく知らないとは言えません。そこでやむを得ず自主的に名簿を作っています。ただ法律の縛りがあるので、作成に際しては本人に名簿掲載の諾否を問います。なぜなら自分の現況を親族に対しても明らかにしたくなく、掲載はよいが非常時連絡先を自主防災会にしたいという人がいるくらいですから。

名簿の管理は厳密にしています。たとえば平常時閲覧できるのは自主防災会長と副会長にとどめて、緊急時以外は開示しないことにしています。

名簿がなくてもご近所で災害時に対応できるのが一番よいのでしょうが、緊急時にあえて近所付き合いしない方にどう対応しましょう。五ツ又でもいざという時のため、せめて名簿があるという状況にもっていかなくてはならないでしょう。

五ツ又自治会老人の日の集い

9月15日、ジョイフルにおいて「五ツ又自治会敬老の日の集い」が開催されました。

第1部は川越ママさんブラスの演奏会でした。日ごろの練習の成果を見事に見せてくれて大変感動的でした。観衆は200人ほどでした。演奏曲は8、中に2曲観衆とともにうたう歌もあって充実です。

第2部は自治会の中の70歳以上の方々を対象にした食事会です。参加者は64名（申し込み73名）でした。今年は演芸の出し物は豊富で、親和会の体操やら、厚生部宮嶋さん指導の（氷川）きよし体操（ズンドコ節）、都甲さん指導の民謡の大合唱、最後はビンゴゲームという段取り。そうそう福島県葛尾村からおいでになった弁天・大黒様もニコニコと飴をまいてましたっけ。

もうすぐ防犯灯はLEDに

秋分を過ぎたにもかかわらず、夜の街がだいぶ明るくなりました。LED街灯のお陰です。川越市のLED街灯の設置は平成26年度中の計画です。でも五ツ又地区の防犯灯は他の地区に先駆けて今年11月中には全数の置き換えが完了します。この広報誌発行の時点で一部取り付けの済んでいないところがありますが、もう少しの辛抱です。五ツ又が他の地区に較べて危険だから配慮したなんてことはありません。そんな評価はありませんのでご心配なく。

既設のところはあまり明るすぎて眩しいというご意見があります。確かに明かり自体を見てしまうと生理的に周りが暗くみえます。こんな時は明かりを手のひらで覆ってください。明かりの向こうの暗がりが結構見えます。

ところで防犯灯をつけるには条件があります。この条件に当てはまらないと設置できません。ひとつは設置場所が東電の電柱であること、もうひとつは農地でないことです。夜間も明るいと農産物に悪影響がありますので。

点滅しないウィンカーに気を付けて

ここ数年、五ツ又に限らずあちこちでウィンカーを点さず曲がる車を多く見かけます。まっすぐ行くと思って安心していると、いつの間にか車の頭が自分の横にあったなんてことがあります。警官も気にしていないようです。

ウィンカーは結構壊れるところらしいので、念のため一声かけたら点きましたから、忘れていたようですね。あるいは省エネなのかもしれませんが、エチケットです。ケチケチしないで点灯しましょう。曲がるところですからスピードは遅く、だから大事には至らないでしょうけど歩行者も気をつけてね。

五ツ又に星がひとつ

今年のプロ野球ドラフト会議で、平成国際大学の佐野泰雄さんが西武ライオンズから2位指名を受けました。ここまで言うと「アッソー、誰それ」の話で終わりそうですが、ここからはよく注意して読んでください。佐野泰雄さんの出身高校は和光高校です。その前は高階中学校です。だんだん近づいてきました。そして決定的な事実、ご両親のお住まいは五ツ又自治会内なのであります。

来年の西武ライオンズが楽しみ、とりあえずピッチャー陣の強化が見込まれます。打者として長打だって期待できます。ご本人がどうお考えかはあずかり知らないことにして、勝手に「五ツ又の星」と呼んでしまいます。わたしライオンズファンなもので。

ご本人は学校の寮住まいですから今こちらにはいません。これから先もライオンズの合宿所住まいですからいません。

話題として最高なのですが、くれぐれも佐野さんご自宅近辺で騒がないようにしましょう。応援はテレビか球場でしましょう。

新河岸駅前整備

新河岸駅前の整備はほぼ中ごろ。立ち退きはあと数件残すのみ、更地が増えてきました。更地の一部でボーリングを開始してますし、低地の駅前の浸水対策として、排水管埋設工事も始まりました。あと3年もすれば、富士見通り拡幅、駅橋上化、東口設置、東・西口にロータリー設置など、新河岸駅前は40年前の片田舎の駅から大きく変貌するのです。駅前の交通安全は相当改善されるでしょう、楽しみです。平成29年3月が完成目標です。

このついでに旧川越街道のあたりでも雨水貯留管築造工事が開始されます。豪雨時の旧道冠水も改善されることでしょう。

砂久保神社の地口行灯

五ツ又だより48号でご紹介の通り、地口行灯は江戸中期に江戸で流行ったもの。お稲荷さんの初午の際、掲げられていました。今はすたれて、一部の地域で保存されている程度ですが、砂久保神社では元旦の正月祭のとき参道に飾ります。具体的には元旦の砂久保神社でご覧ください。駄洒落と戯画がとても面白いものです。日本の庶民文化の小さな花です。それを保存しているのがすごい。お参りついでに参観しましょう。

五ツ又だよりはHPで公開してます

「五ツ又だより」は五ツ又自治会ホームページに第１号から掲載してあります。カラーですので、写真もきれいにご覧いただけます。また、バックナンバーを必要とされるときに印刷できます。

五ツ又自治会ホームページのURLは　http://www.itutumata.jp で、Yahoo、Googleなどでは「五ツ又」で検索いただけます。

お詫び

49号の「第5回五ツ又ボウリング大会」で、各賞の記述の誤りがありました。
優勝は新井正司様、準優勝は亀村雅美様、第3位は浅輪泰允様でした。

お詫びして訂正いたします。

▶▷▶▷▶▷▶▷ 話のネタ ◁◀◁◀◁◀◁◀

高階に別珍ありき

西洋から入った外来語をどう標記するかには決まった約束はないようで、外来語標記は外来語が入り始めた室町時代から明治時代にいたるまで漢字・ひらがな・カタカナなど自由に使われていたようです。今のようにカタカナに落ち着いたのは昭和に入ってからと私は記憶しています。

さて漢字による外来語標記には面白いものがあります。型録・歌留多・倶楽部・瓦斯・馬穴・護謨・天麩羅・浪漫など音が似ていますからわかりやすいものですが、ひとつひねった飛龍頭（フィリョース、がんもどき）、混凝土（コンクリート）、如雨露（ジョーロ）、越列機（エレキ）、止停所（ステーション）となると拍手喝さいなのであります。今回はこの仲間の「別珍」をひとくさり。

別珍、字からすると「とりわけの宝物」なんでしょうか、なんちゃって。「べっちん」と読みます。英語のベルベッティンの漢字表記です。ここまで書くと「ああ、あれね」といわれる方がいらっしゃるでしょうが、よほど衣服に対しての造詣が深い方かも。

なんで別珍を取り上げるのというご質問に対しては「だって高階の特産品だったから」が回答になります。

別珍は綿糸を織りあげた高級服地です。綿糸を普通に平織すると薄手の手拭などの材料となります。これはあまりに日常的すぎて特段騒ぐものではありません。別珍は違います。直線の縦糸に横糸をパイル状に織りあげます。すると横糸が丸く盛り上がります。タオルがそうですね。タオルに較べると別珍はパイルの高さが低く、織り方の密度が大きめです。厚みはデニムより薄く、やわらかです。別珍にはつづく工程があります。パイル状の箇所にハサミを入れて丸い先端部を切ります（剪毛といいます）。この剪毛するハサミが手作りで生産性が上がるよう個人でいろいろ機能を持たせてあります。結果、厚手の毛が立った肌触りのよい生地となります。用途は羽織、下駄の鼻緒、足袋、帽子などで、日常ではなく晴れの日の衣裳です。

耕地が少なく水も少なかった高階地区は江戸時代から農閑期の副業として綿織物の産地でしたが、明治末に高級品のコール天を製造し始め、続いて別珍を手掛けました。初めのころはヨーロッパ製に技術的に劣っていましたが、次第に力をつけ、ヨーロッパが第一次世界大戦で荒廃し輸出が不可能になってからは国際的に独擅場となりました。

関係者が別珍製造に力をつくしたの理由は、収入と生活の向上にほかなりません。大正初めに隆盛期を迎え、高階地区の経済状況は極めてよかったようです。盛者必衰の理、第2次世界大戦のさなか、別珍は贅沢品とされ、製造を断ち切られ風前の灯。しかし戦後は物資不足のお陰で復活しました。二度目の隆盛期です。「ガチャマン（ガチャっと織れば一万円）」の時代となりました。しかし昭和30年代には高度成長期を迎えて生活が洋風化し、足袋や鼻緒は需要が少なくなりました。生産が落ちると同時に昭和40年代には剪毛が人手不足で処理できず、同じく生産地であった磐田市に加工を依頼するまでになり、間もなく廃業するに至りました。

高階のこの事業は富岡製糸場のように官製事業で始められたものではありません。製造技術や実際の製造が地区の篤志家によって進められたものです。さらに特許・実用新案などの申請もしなかったとのこと。理由は「みんなで使えばよい」、です。高階人の心意気を感じます。

もうずいぶん前のことですが、屋根がのこぎり歯のような工場が見受けられました。別珍の工場です。織物の品質維持のため、北側に明りとりの窓を設け、太陽光が直接工場内に入らないようにした工夫です。お歳の方は見覚えがあるでしょう。

同じく綿織物の川越唐桟は川越の名産ですが、こちらは現代も生きています。高階別珍も同じように復活すれば面白いでしょうけど。

このお話は2区の高橋修一様からのリクエストです。また取材に対してご自宅が別珍工場を経営されていた吉野郁惠様と高階市民センターのご協力をいただきました。

別珍ばさみ（ナイフ）